

ギリシアのゲノス

——伊藤貞夫氏の所論をめぐって——

芝 川 治

筆者の関心はギリシアにおける所謂貴族政の問題に注がれてきた。学説史における常識からすれば、ギリシアの貴族とは出生に基づく特権身分であり、特にそれは古期においては万般に亘って平民を凌駕しているとの事であった。然るに、そうした貴族層と雖も頽勢に入るのを免れず、古典期に入って民主政に道を譲ったとされる。凡そこのような解釈は「古典学説」¹⁾と命名して支障のないものである。

さりながら、今日、「古典学説」は猶、維持可能なのであろうか。それを根柢より動揺せしめる学説が現れているのである。²⁾それを代表するのがブリオのゲノス論³⁾とルーセルの『部族とポリス』⁴⁾、就中、前者である。これらは偶々、年を同じくして板行された。ギリシアのポリスには部族^{ビュレー}、プラトリア、ゲノスという集団が存したのであるが、ルーセルはそれらを全体として論述の対象となした。他方、ブリオはゲノスを集中的に論じたものである。

学説史において、如上の集団は氏族制原理に基づくものであり、起源を往古にまで遡るとされる事が多かった。かつ、それらは支配—従属の観点より把握される事が通常であった。⁶⁾ゲノス（所謂「氏族」）とは支配者たる貴族より成り、それは部族、プラトリアを利して権勢を確然たるものとしたなどと唱えられてきた。端的には、プラトリアは貴族の支配装置とされる事もあった。何れにせよ、それらは貴族の権力基盤を構成し、従って、それらの集団は平民の抬頭と相俟って衰滅へと向ったというわけである。凡そかくなるものがギリシア貴族政論においていわば根幹をなすのであったが、その問題点を剔抉したのがブリオとルーセルなのである。殊に、ブリオの論著は徹底した論証と雄偉なる構想とによって古典学史上聳立する名篇である。

ブリオやルーセルの影響には深甚なるものがあるが、それに対して在来説からの批判もなされる。⁷⁾そのうち、特に伊藤貞夫氏は主としてブリオに対して包括的批判を企図する。⁸⁾これはその種のものとしては現下において唯一と思料される。⁹⁾本論文においては伊藤氏の論議に対して若干の論評を加える事とする。事は在来説の在立基盤自体に関るが故に筆者としても避く能わざるものがあるわけである。ただし、筆者の関心よりして、

それは貴族支配の有無という側面に限定して行われる事となる。¹⁰⁾

以下においては、当然の事ながら、伊藤氏の議論が史料的検証に堪うか否かが問われる。それと同時に、思考様式の差違にも注意が払われる。ギリシア「貴族政」をめぐる在来¹¹⁾の思考には特徴的なものが見受けられるが、それがゲノス論を通して昭示される事となろう。従って、ゲノス論は現段階におけるギリシア「貴族政」研究の状況を象徴的に表わすものである。それをここで少々立入って扱うのは機宜に中ると言うべきであろう。

× × ×

伊藤氏はブリオ説の大綱を否定して、学説を旧に復さんとするのであるが、その論点の一つは殺人に関するドラコンの法である。¹²⁾ブリオ力説するところ¹³⁾によらんか、ゲノスはアルカイク期において漸く形成の緒に就き、4世紀からヘレニズム、ローマ治下の時代にかけて盛期を迎えた。¹⁴⁾伊藤氏はそれに異を立てんとしてドラコンの法を用いるのである。氏によるならば、当該の法にはゲノスの語はもとより、その存在を示す直接的証拠は見出すを得ない。¹⁵⁾しかし、そこではプラトリアが役割を果す。¹⁶⁾プラトリアはゲノスを包摂していたのであるから、その事は7世紀後半というドラコン時代に氏族制的集団としてのゲノスが存した事を証する、¹⁷⁾というのである。

さりながら、プラトリアとゲノスは関係浅からずとは雖も、相互に不離の集団ではない。両者は起源、性質を本来的に異にするのである。¹⁸⁾プラトリアあるところ常にゲノス伴うというものではない。肝要なのはホメロス、ヘシオドス、抒情詩など古期の文献においてゲノスを示す語が出来しないのみならず、その觀念、実体が一切見えぬ事、これである。従って、ドラコン法の背後にゲノスを見出すべき根拠は「皆無に近い。」在来、「貴族政期」とされた古期に「貴族集団」たる筈のゲノスは形姿を明確にせず、却って後代に隆昌を来すのである。ゲノスの時期的盛衰に関するそうしたブリオ学説は現存史料を尊重する限りにおいては有力視せざるを得ない。それを否認せんとするのならば一層詳密なる考究をなさなければならない。

なお、ドラコンの法につき今一言。そこにはプラトリア成員10名の選出に関する規定がある (IG I³ 104. 18-19; [Dem.] XLIII. 57). *toutous de hoi pentekonta kai hes aristinden hairesthon*. これは伊藤氏によれば、プラトリア員選出が家柄に基づくべき旨を規定したものである。¹⁹⁾ここには貴族平民間の厳然たる較差が示されるとの事である。この条項は「デーモティオーニダイ碑文」解釈上、伊藤氏の援用するところ²⁰⁾であつたし、氏の学説において、一種、柱石としての役割を演ずるとしても必ずしも過言ではない。それはプラトリアにおいて貴族がゲノスに結集して爾余の平民を支配した事を暗示するというのであろう。

ところで、枢要なのは上掲条文中、19行の *aristinden* である。この語は、通常、「徳に

よりて」の意である。²¹⁾ そうすれば、ドラコンの法は「立派な声望ある人々を選出すべし」と規定した事となる。ただ、それだけの事である。aristinden を「身分的特権に基づきて」なる意に敢えて解さんとするのであれば、用例を探索してその論拠を提示しなければならない。²²⁾ 然るに、そうした作業は全くなされていない。

次にピロコロスの断片 (35a Jacoby)。「プラトリア成員はオルゲオーネスをも、吾人がゲンネータイ (ゲノス成員) と呼ぶところのホモガラクテスをも受け容る事必須なり。tous de phratoras epananches dechesthai kai tous orgeonas kai tous homogalakatas, hous gennetas kaloumen.」この断片は、旧くはゲンネータイの譲歩を証するものと解釈される事が多かった。特権身分たるゲノス員はオルゲオーネスのプラトリアへの受容を余儀なくされたというわけで、²³⁾ 前者は貴族と、後者は「平民」と等置されたりしてきたのである。特権層と然らざる者との争闘が想定さる事少なしとはしなかったのである。

さりながら、ピロコロスの文言に徴すにおいてはその解釈は不適切である。この断片が物語るのはオルゲオーネスをもホモガラクテスをも受容すべしという事で、ゲノス員 (ホモガラクテス) のプラトリア入籍をも保証せんとするものである。しかも、その事をプラトリア全体に強制せんとするものなのである。従って、この法規制定以前においてゲノス員がプラトリアを領導していたとする学説はこの条文自体からしては²⁴⁾ 諾い難い。

「ピロコロス法」はオルゲオーネスとゲノス員 (ホモガラクテス) の自動的入籍を規定したのみのものであろう。さすれば、それよりして、プラトリアには三種の成員存した事、昭然たるものがある。ゲノス員、オルゲオーネスと、その何れでもない者である。何となれば、全アテナイ市民がゲノス員若しくはオルゲオーネスであったとするならば、²⁵⁾ 全員が無審査にてプラトリアに入籍せしめられる事態と化したからである。それは無意味である。

伊藤氏はホモガラクテスとオルゲオーネスの実体如何よりもピロコロス法の趣旨を判知せんとする。前者は事実上貴族を、後者は平民を意味すると氏は論断を下す。²⁶⁾ 旧説へ回帰するのである。然るに、この両者の実体には容易に揣測を許さないものがある。²⁷⁾ それの講究には多大の労力を費さねばならない。従って、伊藤氏の所説には少なくとも性急たる事、否み難きものがある。それとも、氏の主張には何らかの史料的根拠が存するのであろうか。

アテナイの法廷弁論はプラトリアの内部構成を推知せしめる上で貴重なる材料を提供する。そこにはゲンネータイやオルゲオーネスが登場する。先ずゲンネータイであるが、それは²⁸⁾ アンドルーズや²⁹⁾ 伊藤氏の説くように、貴族の特権若しくはその残滓を身に帯ぶのであろうか。それら両氏は、プラトリア入籍に際してゲンネータイが特別の権限を有すると説く。ところで、ゲンネータイの現れる弁論中、アンドキデス 1 番 (125—127)、イサイオス 7 番 (15—17)、偽デモステネス 59 番 (59—61) であるが、それらにおいて入籍

の候補者は血統よりしてゲノスに所属すべきものである。従って、それらをゲノスが審査するのはむしろ当然の事である。この上、デモステネス57番やアイスキネス2番(147)を勘考しても、ゲノスの特権或はその痕跡の如きは看取されない。ゲノスが他のプラトリア成員の入籍を左右した形跡はなく、ゲノス員なるが故にプラトリアにおいて特別扱いを受けるものでもない。³⁰⁾

オルゲオーネスへの登録は法廷弁論においては、唯一、イサイオス2番14において語られる。ここからして、プラトリアにおいてオルゲオーネスがゲンネータイに対して劣格の位置に立つとの推論を下すのは、過度に大胆との譏りを免れまい。³¹⁾³²⁾

以上よりしても、5或は4世紀においてゲンネータイとオルゲオーネスとの対抗関係を措定する学説に賛同する事には躊躇せざるを得ない。しかも、プラトリアは如上の両者のみで占められなかった事を以ってすれば猶更である。イサイオスやデモステネスより推すに、両者の何れでもない、いわば単なるプラトリア員が存し、これが最も多数を算えたであろう。³³⁾³⁴⁾³⁵⁾

アンドルーズの説くところでは、貴族政華かなりし前古典期アテナイにおいて、貴族はゲノスに結集した。そして、従属民をゲノスの下、プラトリアに組織した。プラトリアとは貴族の支配装置との事である。伊藤氏にとってこの学説は頗る重要で、それは氏の論述にとって、いわば通奏低音としての役割を果す。³⁶⁾³⁷⁾しかし、そのように評価するのは適切でない。アンドルーズにとり主たる論拠を提供するのは法廷弁論であったが、そこに現れるゲンネータイを貴族若しくはその末裔と観ずるのは極めて困難だったからである。³⁸⁾³⁹⁾また、ゲノスとプラトリアに大略一対一の対応を設定せんとするのも史料に適合的でない。そもそも、4世紀の史料よりして、3,400年以前の状況を推定せんとするのは慎重を欠くのではないか。これらを以ってするに、アンドルーズ説は牽強附会以外の何物でもない。⁴⁰⁾

最後にデーモティオーニダイ碑文。これも伊藤氏の立論中、枢要の位置を占めるものである。IG II² 1237はプラトリア関係の決議を録したものであるが、そこにはデーモティオーニダイとデケレイエイスという二つの集団が姿を見せる。伊藤氏の説くところでは、デケレイエイスがプラトリアの名称であり、デーモティオーニダイはその中の特権的小集団、即ちゲノスに他ならない。それは396年に至るまでプラトリアの成員登録その他に関して特殊の権限を保持していた。然るに、そうした貴族政期以来の特権には制限が加えられるに到った。ポリス内部における民主化が進展したとの事である。⁴¹⁾⁴²⁾

他方、ブリオによればプラトリアの名称はデーモティオーニダイ。「デケレイア人の家」とは何らかの点においてデケレイアの地と関係を有する集団。プラトリア決議の目的であるが、それはペロポネソス戦争の齎した無秩序より復旧して、プラトリアの成員構成を糺すところにあった。第一決議においては、そうした作業の一部が「デケレイア人

の家」に委託された。それはその作業を円滑に遂行すべく期待された故である。ただ、⁴³⁾それだけの事である。

このプラトリアの名称はデーモティオーニダイか、はたまたデケレイエイスか、この点、議論には紛々たるものがある。デーモティオーニダイを採用するのが無理のないところ⁴⁴⁾であるが、それは何れにせよ、プラトリア内に小集団が存したのは確実である。問題はそれが特権を帯ぶか否かである。その事を首肯せしめる証拠は欠如する。⁴⁵⁾手続も万般民主的に行われるし、その点、第一、第二決議を通して変化はない。⁴⁶⁾ブリオが説くように、これらの決議は民主化を企図したものではないのである。伊藤氏は自説を強化せんとしてドラコンの法や法廷弁論を引証する。しかし、これらが有用でないのは既に叙した通りである。ここにおいても、全体としてはブリオに左袒すべきではないか。彼の解釈が最も自然なのである。このプラトリアに関して特権やその削減を云々する事自体、怪訝すべきなのである。⁴⁷⁾

以上、伊藤氏の論点はこれらに尽きるものではない。それは更に詳細であり、多岐に亘る。それをここでは約略したのみ。ゲノスについては一層精思すべき事、縷言の要もない。ただ、ここに記した事のみよりしても議論の特徴は覚知し得るのではないか。上においては「自然、史料に忠実」などの形容を屢次に亘って用いた。その対極に位置するのが「無理多し、性急」などである。ブリオが何れに該当するかは自ずと明白である。彼の一大特長はここにある。ブリオは或る意味において素朴なのである。彼は博引旁証、周到綿密のみならず、史料に虚心に対峙して合理的なる結論を導出したのである。そして、それを可能ならしめたのは強靱なる思考力である。その故に、学説の激の如きに害なわれなかったのである。⁴⁸⁾彼の鴻業の秘密はここにある。

伊藤氏であるが、これは宏遠なる学識を有し、慎重なる論議を以って知られ、また一瞬の懈怠もなく孜々として研鑽に勤しむ様には敬仰措く能わざるものがある。氏の学問的功績が著大なる事は万人の承認するところであろう。然りと雖も、氏の精緻極りなき思考に陥穽が潜む事を看過するわけにはいかない。一つには、固定観念が牢固として頭脳を領するのではないか。古期における貴族政からその権力基盤が破碎されて平民支配が確立したという「古典学説」の図式を絶対視してしまうのではないか。この事は旧学説の通弊だったのであるが、ゲノス論をもその図式の中に組込んでしまうのである。⁴⁹⁾そのために、例えば法廷弁論に関してブリオやランバートを無条件に擯斥し、アンドルーズ学説などしか受容しない結果に立到ったのではないか。aristinden⁵⁰⁾に関して学説を黙殺せざるを得なかったのもそのためではないか。

更に、上記とも関連するが伊藤氏には護教論的傾向も感知される。既に叙したように、在来、ゲノスに結集した貴族がプラトリアを駆使して民衆を支配したなどと唱えられてきた。⁵¹⁾ところが、ブリオ説を肯定した場合、貴族支配なるものの論拠が危殆に瀕す。「こ

れまで有力説が想定して来たようなゲノスの存在を否認する場合、前古典期ポリスにおける貴族支配がそれでは何によって可能であったか、にまで（ブリオは）説き及ぶことがない。⁵²⁾ ここにおいて、伊藤氏は危機意識を抱懐する。ゲノスの代案としてローマにおける^{クリエンテラ}庇護関係の如きをギリシアに求めるのは困難であるが故に、氏はブリオ論駁を試みたのであった。しかしそれは失敗に畢った。更に強力なる反論が提起されない限りはブリオ説（それと共にルーセル説）の大意は承認するより他はない。ゲノスは一様ではないのであるが、それは勝義においては神官職を世襲する宗教的名門 *famille sacerdotale*⁵³⁾ であろう。もとより、ブリオ説の各部分には難点も算えられるが、ゲノスが何でなかったかという点には否認すべからぬものがあるのではないか。

然らば、吾人としてはブリオ及びルーセル学説に如何に対処すべきか。一つの可能性としてはそれを既存の枠組の内部において活用する事がある。さりながら、氏族制や「貴族の支配装置」という虚妄より訣別すべきというのであれば、その事は難事に属するのではないか。今一つの方向は旧き観念自体を棄擲する事、若しくは大幅に修正する事、これである。かくて、ゲノス論は新旧両観念の相剋^{まじ}の場なのである。吾人としては⁵⁴⁾ 輪より脱出しなければならないのではなかろうか。古期のギリシアにおいては、⁵⁵⁾ 身分的支配などが確立していたのであろうか。別稿において論じた通り、問われねばならぬのはこの点なのである。ブリオのゲノス論とはまさに「古典学説」という観念の枠組⁵⁶⁾自体に変革を迫るものなのである。

註

- 1) 典型的には清永昭次「古典古代における貴族の特質—ギリシア・ポリス社会」（『歴史教育』11巻8号、昭和38年）10—16ページ。伊藤貞夫氏も清永氏とほぼ見解を共有するものと見られる。
- 2) 芝川治「試論、ギリシアの『貴族政』」。本稿は本来、「試論」の一部として執筆されたものである。
- 3) F. Bourriot, *Recherches sur la nature du géno*s I-II, Lille-Paris 1976. （以下、Bourriotと略記。）
- 4) D. Roussel, *Tribu et cité*, Paris 1976.
- 5) 氏族制に関し、一方の思考を代表するのはフュステル・ド・クーランジュ (N.-D. Fustel de Coulanges, *La cité antique*, Paris 1864) やグロッス (G. Glotz, *La solidarité de la famille dans le droit criminel en Grèce*, Paris 1904) である。
- 6) 上記二点をめぐっては、Bourriot, 189-198.
- 7) ブリオとルーセルをめぐる学界の動向に関しては Th. Schneider, Félix Bourriots “Recherches sur la nature du génos” und Denis Roussels “Tribu et cité” in der althistorischen Forschung der Jahre 1977-1989, *Boreas* 14-15, 1991-92, 15-31. 伊藤貞夫「古代ギリシアの氏族について—新説への懐疑—」（『史学雑誌』106編11号、平成9年）1—16ページ。（以下、「氏族」と略す。）
- 8) 「氏族」1—49ページ。

- 9) リットマン (R. J. Littman, *Kinship and Politics in Athens 600-400 B. C.*, New York 1990, 18) やペチルカ (J. Pečírka, Probleme der Erforschung der frühen griechischen Polis, *Klio* 69, 1987, 369-370) もブリオを論難するが、それらには語るに足るものはない。
- 10) 従って、伊藤論文の六節を中心として議論は進められる。伊藤氏の場合、血縁と地縁との対立や氏族制の観念その他にも問題は多いが、それらには論及するは得ない。
- 11) 不自然な史料解釈や予断の類が多い。芝川「試論、ギリシアの『貴族政』」39ページ他。
- 12) IG³ I 104.
- 13) Bourriot, 539-547.
- 14) ゲノスの時代的遷移が旧学説におけるとは逆転せしめられる事となる。旧説では、当然の事ながら、ゲノスの盛期は古期に置かれる。
- 15) ブリオのドラコン論は Bourriot, 290-301.
- 16) IG³ I 104, 13-19.
- 17) 伊藤「氏族」19-20ページ。
- 18) Roussel, *op. cit.* 133 その他。なお、後述、4 ページ。
- 19) 「氏族」43ページ註⑤。伊藤貞夫「古典期アテネのフラトリアーIG II² 1237 の場合」(『史林』71巻5号, 昭和63年) 26ページ。(「フラトリア」と略記する。)
- 20) 伊藤「フラトリア」25-26ページ。同『古典期アテネの政治と社会』(東大出版, 昭和57年) 187-190ページ。
- 21) 芝川治「アリストテレスと古アテナイの国制」(『西洋史学』168号, 平成5年) 41ページ註⑤。この論文の印行後、筆者は *Thesaurus Linguae Graecae* において aristinden を検索した。98の用例がそこから検出されたが、それらは何れも「徳に基づきて」の意であろう。「門地によりて」を意味する例は見出すを得ないであろう。
- 22) 本文に叙したドラコンの法律であるが、これはデモステネスの引用 ([Dem.] XLIII. 57; Dem. XXIII. 37) より瞭然たる如く、4世紀においても現行法であった。aristinden を含む条項はまさに引かれるところであった ([Dem.] XLIII. 57)。伊藤氏の解釈よりすると、その時点においても身分的較差は無視し難いものとなる。しかし、それでは氏の理論よりしても自家撞着が生ずるのでないか (伊藤『古典期アテネの政治と社会』190ページ参照)。アテナイにおける貴族は百有余年以前にその影響力を喪失しているとの事であるから。それに対し、当該語句を本文に記したように極く自然に解せばそのような難点は生起しない。aristinden は後代においても普通に用いられる語である。有徳者を敬重するのは如何なる時期においても当然至極なのである。
- 23) 因みに、ドラコンの時点においてアテナイ市民は全員プラトリアに加入していた。旧説が迂遠たる事は Bourriot, 608-615.
- 24) A. Andrewes, Philochoros on Phratries, *JHS* 81, 1961, 1; Bourriot, 21-22.
- 25) この点は他ならぬアンドルーズ唱導するところである (前註所掲論文1-2ページ)。
- 26) 「氏族」23ページ。
- 27) 要は史料僅少に過ぎるのである。殊にホモガラクテスは難物である。学説史は Bourriot, 663-668. ホモガラクテスに関する史料はピロコロス, 古辞書, 古註の他にはアリストテレス (*Pol.* 1252b18) と, homogalakotos の形でロンゴス (IV. 9) を算えるのみ。これらは何れも伊藤説に論拠を提供するものではない。オルゲオーネスをめぐっては W. S. Ferguson, *The Attic Orgeones*, *Harvard Theological Review* 37, 1944, 61-140.
- 28) Andrewes, Philochoros, 5-9.
- 29) 伊藤「氏族」23-24ページ。同「フラトリア」26-28ページ。
- 30) これらの点はブリオ (648-652) の指摘したところである。ここはもとよりテキストの細

部に亘る穿鑿を行うべき場ではない。ランバートの詳論(S. D. Lambert, *The Phratries of Attica*, Ann Arbor 1993, 66-74) を参看されたい。本文に記した弁論の解釈に際しては、ピロコロス断片における自動入籍の規定を考慮に入れるべきである。

- 31) 伊藤「氏族」23ページ。
- 32) オルゲオーネスとプラトリアの関係をめぐっては Lambert, *op. cit.* 76-77.
- 33) 伊藤「氏族」23-24ページ。
法廷弁論に現れるゲンネータイは必ずしも社会的地位を高くしない。Roussel, *op. cit.* 72; Lambert, *op. cit.* 62; Bourriot, 1054. なお、アイスキネス 2 番147に関して付言するに、エテオブータダイは宗教的名門(エテオブータダイが名門として著名なのはこの点においてなのである。cf. I. Toepffer, *Attische Genealogie*, Berlin 1889, 117) たるが故に尊崇を受けたのである。それ以上のものではない。念のため。この点、ピュッロスなる人物など好例であろう。これはエテオブータダイという宗教上の名家に属するが故に注目を集め、デモステネス(XXI, 182)の挙例に赴くところとなったのである。ピュッロスなど社会的には無に等しき人物ではあるが。Bourriot, 1320-1321.
コナー(W. R. Connor, *The New Politicians of Fifth-Century Athens*, Princeton 1971, 9-14)の唱えるところでは、一定の時期以前のアテナイでは有力政治家はゲノスに属する。しかし、ブリオ(1216-1217)によればゲノスを背景として抬頭した政治家はいない。何れにせよ、祭祀と政治的影響力が各々別箇の次元に属する事は確認すべきである。デイヴィス(J. K. Davies, *Athenian Propertied Families 600-300 B. C.*, Oxford 1971, 370)などは、この点、印象的なものがある。オルゲオーネスもそうであるが、ゲンネータイは第一には祭祀集団である。テップファーとパーカー(R. Parker, *Athenian Religion: A History*, Oxford 1996, 284-327)の掲げるゲノスには社会的に無名のものが多数に上る。
- 34) ゲンネータイやオルゲオーネスは言及されないのみであって、現実にはプラトリア内に多数存したと主張されるかもしれない。然るに、例えばイサイオス12番(3, 8)を繙くに、もしも原告がゲンネータイ若しくはオルゲオーネスの一員であったとするならば、それをも強調した筈である。それは原告の立場を強化する事になったからである。然るにそれをなさないのである。これらの事実より観ずるに、ゲンネータイと殊にオルゲオーネスはプラトリア内において少数だったのであろう。註32)。
- 35) Bourriot, 632-635. ピロコロス法について上に叙した事がここにおいても証される。
- 36) Andrewes, Philochoros, 14-15.
- 37) *Id.* Phratries in Homer, *Hermes* 89, 1961, 140.
- 38) 伊藤「氏族」8-9, 14ページ。
- 39) デーモティオーニダイ碑文は直後に扱う。
- 40) アンドルーズの場合、強引な史料操作が許多に上る。「ピロコロス」5-6ページにおけるイサイオス5番15-17の解釈などその一例である。
- 41) これを詳細なる分析に付したのが、伊藤「プラトリア」。
- 42) 伊藤, 同上論文, 29ページ。なお、碑文中ゲノスの語はこれを欠く。
- 43) Bourriot, 639-648.
- 44) Cf. C. W. Hedrick, JR., *The Decrees of the Demotionidai*, Atlanta 1990, 75-85; Lambert, *op. cit.* 95-141.
- 45) Lambert, *op. cit.* 104-106.
- 46) Bourriot, 647. ティアソスをめぐっては Lambert, *op. cit.* 90-93.
- 47) 4世紀における「特権の残存」については註22)。
- 48) 旧学説は夥多の人工的操作を俟って始めて成立したのである。この事はブリオによる学説史回顧よりも明瞭である。Bourriot, 1-198. それにしてもサラミニオイのゲノス(Fer-

guson, *The Salaminioi of Heptaphylai and Sounion*, *Hesperia* 7, 1938, 1-74) など何処が貴族集団なのであろうか。

- 49) 前註参照。旧学説にはア・ブリオリの論断が多くを算えた。ゲノス論に限らず貴族政、民主政全般に関する近代人特有の思考については註11)。
- 50) 註21)。
- 51) アテナイ史において有力者がプラトリアを動員して政治的争闘を行った例などあるのだろうか。フォレスト (W. G. Forrest, *The Emergence of Greek Democracy*, London 1966, 50-58) の叙する「ギリシアにおける形態」など「根拠なき想像」に過ぎない。プラトリアはルーセルの力説するように支配のための道具ではない。
- 52) 伊藤貞夫「ポリス社会とパトロネジ」, 長谷川博隆編『古典古代とパトロネジ』所収, 名大出版, 平成4年, 25ページ。
- 53) ゲノスとは、場合によっては世俗的名門（アルクメオニダイはその一例）を指す事もあるが、その際、「貴族の特権」などは含意されない。ブーセロス一族もゲノスと呼ばれる事がある ((Dem.) XLIII. 73. また 79, 80) が、これなど特権の帯びようもあるまい。ブーセリダイなど一介の富裕なる一統でしかないであろう。伊藤氏の議論(「氏族」28-29ページ)はここにおいても傾向的である。ブーセリダイをアルクメオニダイより質的に区別すべき根拠はこれを欠く。Bourriot, 568-569, 1365-1366.
- 54) 6ページに引用した伊藤氏の言であるが、そのように問う事自体詮無きところなのである。
- 55) 芝川「試論、ギリシアの『貴族政』」。
- 56) ブリオによればヘレニズムローマ治下の時期において、ギリシア社会は固定化の様相を呈するに至った。その頃初めて、その名に値するだけの貴族身分の誕生を見たというわけである。(芝川, 同上論文, 40ページ)。実にブリオはそこまでに及ぶ構想を立てているのである。この点、「偉とすべき」なのはフィンリー(伊藤「氏族」10ページ)ではなくブリオなのである。